

第八章 施設・設備等

〔第八章の1〕大谷大学文学部

【到達目標】

歴史と伝統を現在に伝える赤レンガのシンボル棟（尋源館）を中心に、潤いあるキャンパス空間を確保し続け、安全で快適な学修環境を確保することを目標とする。

そうした目標を実現するため、以下のような具体的な目標を掲げている。

- ①教育研究用施設・設備や情報処理機器の充実を図るとともに、老朽化した建物については計画的な改築をおこなう。
- ②「学生のための生活の場」として、学生が自由に談話したり食事したりできる施設（学生談話室）の拡充をはたす。
- ③構内のバリアフリー化を年次計画で推進する。

（施設・設備等の整備）

- A群・大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性
- B群・教育の用に供する情報処理機器などの配備状況
- C群・社会へ開放される施設・設備の整備状況
 - ・記念施設・保存建物の保存・活用の状況

【現状の説明】

本学は、京都駅を起点として市の中央部を縦断する都市軸の北端あたりに位置し、さらに北へひろがる郊外と都心部の結節点にキャンパスが広がっている。京都市営地下鉄烏丸線の北大路駅、北大路バスターミナルが最寄りにあり、交通アクセスの良い通学の便に恵まれた位置にある。また、付近には賀茂川が流れており、北山・西山・東山の三山の景観にも恵まれ、市の中心地にあつて非常に良好な自然環境を背景としている（なお、満足度アンケートの「通学のための交通の便がよい」「キャンパス周辺は学生生活を送るのに便利である」「キャンパス周辺は学生生活を送るのに安全である」項目にたいする満足度は、それぞれ、80.3ポイント、59.1ポイント、47.8ポイントであり、満足度が高い）。

かつて京都の多くの大学は発展膨張によって都心から郊外へ広い土地を求めて移転したが、本学は量的拡大を目的とせず、都市にとどまり質の向上を図り、大学の命運をこの地に託す基本方針を確認し、キャンパスの基本構想を設計した。その後、学園総合整備計画、新学科の開設にともなう教室棟の建築などのキャンパス整備をおこなってきた。また2001年10月には、近代化100周年記念事業の一環として情報センター構想のもと、図書館、博物館、学生の総合研究室、真宗総合研究所からなる学術情報の発信基地として、大谷大学真宗総合学術センター（響流館）を竣工した。2002年には事務組織の再編をおこない、教務、学生支援部門を1箇所に集約するなど、学生の利便性を考えた取り組みもおこなっている。

校地は、京都市北区小山上総町の本部キャンパス 43,475.09 m²、滋賀県大津市の湖西キャンパス（グラウンド、セミナーハウス）36,874.49 m²、および学生寮などその他の校地 4,853.05 m²からなり、総面積 85,202.63 m²を大谷大学（大学院を含む）、大谷大学短期大学部で共用している。「大学設置基準」

第 37 条、および付則による収容定員に基づく必要校地面積は、28,400 m²であるので、十分余裕のある校地面積を有しているといえる。

主たる校舎は、すべて本部キャンパスにあり、大谷大学（大学院を含む）専用、大谷大学短期大学部との共用を合わせた総面積は 49,311 m²である。「大学設置基準」の校舎面積、11,700 m²を十分満たしている。

本部キャンパスは 11 棟からなる。館名・校舎面積・竣工年は下表のとおりである。

館名	校舎面積	竣工年	備考
はくそうかん 博綜館	9,351.60 m ²	1982	
じんげんかん 尋源館	1,157.62 m ²	1913	1982 年改築
講堂棟	3,835.26 m ²	1986	
こうりゅうかん 響流館	20,235.58 m ²	2001	
1 号館	8,266.03 m ²	1965	1990 年、1993 年一部増築
2 号館	3,338.53 m ²	1978	2003 年一部増築
3 号館	1,162.88 m ²	2000	
もんしんかん 聞思館	1,708.11 m ²	1961	
しじょうかん 至誠館	3,690.90 m ²	1961	2002 年改築
体育館	4,857.06 m ²	2000	
部室棟	2,183.52 m ²	2000	2005 年一部増築

表 8.1-1 校舎一覧

これらの校舎のうち、1 号館の一部、聞思館は老朽化してきているため、建替え・改修の計画時期に入っている。

教育用施設として、1 号館、2 号館、3 号館、博綜館、尋源館、響流館に、講義室が 44 室、演習室が 30 室、実習室が 19 室ある。講義室の内訳は、収容人数 50 人以下の教室が 9 室、51 人から 100 人の教室が 18 室、101 人から 200 人の教室が 10 室、201 人以上の教室が 7 室ある。その他、実習室として情報処理室が 10 室、語学実習室（CALL、LL）教室が 2 室、心理学実習室、社会福祉実習室、大谷派教師課程実習室、博物館学課程実習室が各 1 室ある。

各室とも、ビデオ・DVD などの教材が使用できるよう、AV 機器の整備を順次おこなっている。

1 施設

1.1 体育施設

体育施設としては、体育館（4,857.06 m²）、柔道場、弓道場がある。体育館には、1 階にリズム体操室兼剣道場、トレーニング室、卓球場、空手道場があり、2 階はバレーボール、バドミントン、バスケットボールのそれぞれ公式戦が可能なアリーナとなっている。

また屋外体育施設としては、滋賀県大津市の湖西キャンパスに 24,012.05 m²の運動場用地を有している。運動用地としては、総合グラウンド、テニスコート 2 面およびトレーニング室（158.40 m²）を擁する体育施設がある。2002 年には隣地にサブグラウンド 5,800.04 m²を整備した。本部キャン

バスと湖西キャンパス間の移動にはスクールバスを運行している。

1.2 教育用施設

1.2.1 教職支援センター

2006年、至誠館2階に開設。教職課程履修生の授業や実習指導などをおこなっている。

1.2.2 実習支援センター

2007年、2号館1階に開設。教育実習、社会福祉関係の施設実習、短期大学部幼児教育保育科の各種実習の事前事後指導から個別相談まで対応している。

1.2.3 GLOBAL SQUARE

2006年、響流館3階に開室。外国語学習を支援している。

1.2.4 人権センター

博綜館1階に設置されており、各種人権問題に関する図書や資料を配架して学生が自由に学習できる閲覧スペースを有するとともに、人権センター員が常駐し、人権問題に関する相談や質問に対応している。

1.3 研究用施設

1.3.1 個人研究室

専任教員（助教を除く）には個人研究室が1室ずつ与えられ、研究のみならずオフィスアワーなど学生指導の場となっている。各室には、情報コンセントがそれぞれ設置され、学内LANが利用可能となっている。

また、響流館4階には、学外（海外を含む）から招聘した教員、研究者のための客員研究室が3室用意されている。

1.3.2 総合研究室

学生が自由に利用できるよう配慮された学生専用の総合研究室を設置している。これは本学の特色とすべき設備であるといえる。2001年10月竣工の響流館3階に、かつて第1研究室から第5研究室の5つに分かれていた研究室機能を総合研究室として1フロアに集約した。総合研究室は1,761.01㎡、座席数468席。一部の机には情報コンセントを設置し、学生は自由に使用できるようになっている。総合研究室を整備したことにより、それまでの学生用自習室の席数合計260席が468席に増加し、学生の自習環境は大幅に改善されている。

総合研究室は内部階段で図書館と行き来することができる構造となっており、資料閲覧など研究を進める上で、利便性に富んだ施設となっている。必要な辞書類や基本図書など約22,000冊と、学術雑誌約360種類を開架図書として配置し、学生の学習環境の整備を図っている。研究室を1フロアにすることにより、学科や専門分野間の垣根をなくし、異なる分野の学生・研究者の交流を促進し、視野を広くもって学問研究に取り組む環境が整備できた。

さらに総合研究室は大学院生も共同して利用することとしており、博士後期課程の大学院生には個人専用のデスクも用意している。また総合研究室には、各分野の任期制助教もデスクを置き、研究活動に従事している。このことは、学部学生の研究に際して大学院生や助教の指導を仰ぐこ

とができるという利点を有しているばかりではなく、助教や大学院生にとっても後輩の指導にあたることによって自己の研究活動を省みる機会を生む効果も生み出している。研究室には職員が常駐しているほか、大学院生などによる情報教育アシスタントも配備して学生の情報リテラシー向上の支援をしている。

また、総合研究室中央部には円形の大型テーブルを配置するとともに、室外には授業にも利用しうる演習室6室を付属して設置し、学生・大学院生の共同研究や、輪読会活動に使用できるよう配慮している。

1.3.3 図書館

図書館は、響流館1階・2階に閲覧室、地下1階・2階に書庫を有する構造からなる。面積は7,604.80㎡で、閲覧席数が578席用意されている。計画最大収容冊数は約160万冊で、現在75万冊を収蔵している。(響流館が完成する)以前の図書館は閉架式が中心で、開架図書は2万冊であったが、現在は開架図書を31万冊(このほか、総合研究室に開架図書2万5千冊を配架)と大幅に充実させるとともに、書庫への入室もできるようになっている。

1.3.4 博物館

博物館については、ほかに適切な場所がないので、ここで、施設・設備に加えてその機能についても述べることにする。大谷大学の博物館は、2001年に建築された響流館の1階部分に設置された。貴重資料を収蔵する施設としての配慮から、建築資材の乾燥を待って2年後の2003年10月に博物館相当施設の指定を受けて開館した。その設備の概要は下表のとおりである。

室名	面積
展示室	281.7 ㎡
収蔵庫 (2室)	245.5 ㎡
一時保管庫	31.2 ㎡
調査・研究室	74.7 ㎡
展示準備室兼実習室	143.2 ㎡
前室 (4室)	65.3 ㎡
倉庫など (5室)	62.1 ㎡

表 8.1-2 博物館設備一覧

その他、専用搬入路および大型エレベーター、薫蒸室などを備えている。展示ケースとしては壁面取り付け専用ケースL字型2面のほか、行灯型ケース4台、覗き型ケース4台、両面覗き型ケース5台を整備した。

これらの施設・設備は、その保管、安全管理に十分配慮し、恒温・恒湿の環境と防火管理ならびにセキュリティ対策に万全を期している。また、本学が所有する重要文化財はもちろんのこと、他機関の所有する重要文化財も展示しうるよう、重要文化財公開承認施設としての認可が得られるよう基準を満たすものとして設備されている。

一方、所蔵資料は、従来図書館において所蔵していた資料のうち、博物館が所蔵することが適当であると判断される資料や、形態的に博物館が保管することが適切である資料などを移管登録

し、以下の分野を網羅している。

- ・考古資料
- ・絵画資料
- ・書跡資料
- ・工芸資料
- ・彫刻資料
- ・民族資料
- ・金石拓本

これらの資料の点数は、重要文化財 8 点 (2007 年 5 月現在) を含み、合計約 4,300 件、約 12,000 点に上っている。所蔵資料については歴史分野を中心とする博物館として、その内容と分量は誇りうるものである。

次に展示活動としては、開設初年度に開館記念特別展として、所蔵品のなかから名品を選定して展示したほか、常設展を一度開設した。その後、2007 年度にいたるまで例年、特別展 1 回、春夏秋冬の企画展を各 1 回の計 5 回の展覧を開催しており、開館しばらくは学生の認知度も低かった (満足度アンケートの「博物館の展示をよく見学する」項目にたいする満足度は 15.1 ポイント、不満度 63.6 ポイントであった) が、毎年、入館者数は増加傾向にある (表 8.1-3 を参照)。開館日の総数は、各年度平均して 130 日余を確保している。2006 年度特別展以降は、博物館入りロロビーに設置している大型ディスプレイに展覧内容の解説や参考資料を編集した映像コンテンツの提示することを慣例化し、2007 年度特別展においては音声解説システムを導入して、啓発活動に努めている。

教育活動としては、2005 年度以降、継続して、博物館学課程を履修している実習生が企画する実習生展を併催するなどの活動もおこなってきた。またこれらの展示活動に連携して関連内容の記念講演会を開催するなど、文化財に関する知識を普及する活動をおこなってきた。

年度	展覧開催数	入館者数
2003	特別展 1 回、企画展 1 回	3,775 名
2004	特別展 1 回、企画展 4 回	5,258 名
2005	特別展 1 回、企画展 4 回	7,276 名
2006	特別展 1 回、企画展 4 回	8,425 名
2007	特別展 1 回、企画展 4 回	7,613 名

表 8.1-3 博物館入館者数

博物館の運営にあたっては「大谷大学博物館規程」および「大谷大学博物館運営細則」を定めているほか、「大谷大学博物館委員会規程」を定めて、学内の関係教員などによる委員会を置き、運営の方針などを検討している。

1.3.5 真宗総合研究所

1992 年から約 10 年間学外にあった真宗総合研究所を響流館竣工に合わせて響流館 4 階に移転開設した。真宗総合研究所は 1,453.10 m²からなり、学内外の研究者による個人研究、共同研究が

おこなわれている。研究所を学内に移転したことにより、移動に要した時間の削減など多くの効果を生んでいる。

2 設備

設備面として、教育の用に供する情報処理機器が配備された情報処理教室、PC 設置教室、設置台数は下表のとおりである。

館名	室名	PC 台数	備考
1 号館	情報処理室 1	61	
	情報処理室 2	55	
	1313 教室	43	CALL システム対応
2 号館	情報処理室 3	36	
3 号館	3101 教室	32	
	3102 教室	32	
	3201 教室	31	
	3202 教室	26	
	3203 教室	5	
	3204 教室	5	
	3301 教室	21	

表 8.1-4 PC 設置教室一覧

2004 年度以前入学生適用の旧カリキュラムでは、第 1 学年 2 単位必修科目の「情報リテラシー」があったことから情報処理室 1・2・3 の整備をおこなってきた。現在のカリキュラムでは選択科目として「人文学と情報」の科目を開講するとともに、空き時間は自由使用が可能となっている。3 号館は人文情報学科開設に合わせて整備をおこない、人文情報学科の授業を中心に使用している。3 号館の教室も空き時間は自由使用が可能となっている。これらの機器は、年次計画を立て更新をおこなっている。また、情報コンセント設置教室・演習室が 27 室あり、必要に応じて PC 持込使用が可能になっている。プロジェクターなどによる教材の投影が可能な教室・演習室も 27 室ある。

教室以外では講堂、メディアホールにプロジェクターを設置している。700 人収容の講堂には 250 インチのスクリーンに投影が可能である。メディアホールは 148 席で、200 インチスクリーン 2 面を備え、高輝度の大型プロジェクターにより、PC・OHP・S-VHS・DVD・TV などの投影が可能である。マルチメディア演習室では、デジタルコンテンツを使った高度な演習や研究活動をおこなうことが可能になっている。

響流館の 1 階には博物館および展示ギャラリーの施設がある。ギャラリーは文化・芸術系クラブの作品展、人文情報学科の成果物の展示など、幅広く利用されているほか、「近隣 昔の写真展」など、近隣住民をも視野に入れた企画展にも活用されている。また、ギャラリーには 2 台の 50 インチのプラズマディスプレイを設置し、来館者向けに公開講座の予告編などを放映している。

学内のスタジオにおいては、マルチメディアコンテンツの製作もおこなわれており、その成果は授業での発表にとどまらず、図書館に所蔵するとともに、Web サイトを通じて公開（限定公開も含む）

されているものもある。

2.1 LAN 設備

学内 LAN は幹線として、ギガビットイーサネット（通信速度を 1Gbps に高めた高速の Ethernet 規格）の光ファイバーを各棟へ敷設している。各棟内の支線は、図書館、総合研究室、真宗総合研究所、情報処理教室をはじめ、演習室ほか一部の一般教室にも LAN を敷設し、日常の授業、学習、研究に供している。また学内 LAN の設備として、全学生向けにファイルサーバ（LAN 上でファイルを共有できるサーバ）を設置し、学内のどの場所からでもつねに同一の PC 環境で使用できるようにし、人文情報学科の学生は無制限、他の学生は各 200 メガバイトまでのファイルサーバが割り当てられている。このほか、小規模ながら語学教材を中心とした教材サーバを設置し、これについても場所にとらわれずに利用が可能となっている。

学内において学生が自由に使用できる PC 端末の台数は、1号館（3 教室）156 台、2号館（1 教室）37 台、3号館（7 教室）139 台、総合研究室 110 台、GLOBAL SQUARE 5 台、の合計 447 台（いずれも 2007 年度実績）である。総合研究室においては、ウィルス対策ソフトのインストールを条件に、個人 PC の LAN への接続も認めている。

2.2 貸出用ノート PC

貸出用 PC を用意している。教育後援会からの現物寄付や、大学で用意した貸出用ノート PC は図書館に 31 台、総合研究室に 71 台（いずれも 2007 年度実績）ある。貸出用ノート PC は、それぞれのカウンターで手続きすることによって利用することができる。貸出用ノート PC は図書資料を参照しながらの学習、研究に利用されているほか、レポート、論文作成にも使用されている。

3 記念施設

記念施設としては、1913 年に建築された赤レンガ造の尋源館（旧本館）がある。尋源館は三島由紀夫の小説『金閣寺』にも登場し、その姿が描写されている建物であり、1913 年、現在の地に大谷大学が移転開校した当時の面影を残す唯一の建物として、同窓生にとどまらず、地域の方からも大谷大学のシンボルとして愛されている。また、1999 年には国の登録文化財として指定を受けている。

尋源館は 1982 年に赤レンガの外観を残して内装を全面改修し、現在は 1 階を教室、2 階は毎朝の勤行や講演会などに活用される尋源講堂（小講堂）、事務室、会議室として使用している。2006 年に車寄せ庇の補修をするなど、保存に努めている。

また、母校で結婚式を挙げたいとの卒業生の要望にこたえ、尋源講堂では仏前結婚式もおこなっている。

【点検・評価（長所と課題）】

響流館建設および建設後に空いた施設の有効利用や整備により、図書館、研究室、演習室を充実することができ、学習環境が改善された。特に自習環境の座席数を増やすとともに、一部の机には情報コンセントを設置し、学生が自由に使用できるようにするなど情報化に対応した。

教室などの施設（建物）についての課題としては、老朽化してきている建物の建て替えや、補修方法なども含め、改築・改善計画を立てる必要がある。設備面では、カセットテープから CD、ビデオから DVD、PC 使用など教材の変化への対応、機器の更新が後追いとなっていることから、整備をおこなう必要がある。

博物館施設の開設については、仏教を世界に解放するという本学の理念からして適切な措置であった。博物館運用の方針については、仏教文化財・真宗文化財を扱う特色ある博物館活動をおこなうと確定しており、開設当初の移管資料においても十分な内容を保持しているが、その後も継続して関係資料の収集に努力していることは評価できる。ただし、その年間予算総額は図書館資料費との関連において決定していることから一定の制約があり、今後の課題といえる。博物館の展観などについては、特別展のテーマは変化に富み、一定の評価を与えることができる。また博物館の開館日数は、博物館相当施設として開館日数の目安として示されている年間 100 日を超えているが、日曜日の開館ができない現状は、博物館設置の目的のひとつが社会への開放活動であると考えるとき、改善に向けた検討を要する事項である。同時にこのことは、博物館設置の目的を再度明確にすべき課題を提起しているといえる。すなわち、大学教員・学生の研究のための博物館であるのか、一般社会に向けて歴史・文化を開放してゆく博物館であるのかの基本姿勢に関する点である。その他、今後、入館者数を増加させる努力と平行して、文化財理解を目的とした活動の充実が重要であり、そうした活動の一環として、資料をデジタル化して紹介する取り組みも強化されるべきである。

【将来の改善・改革に向けた方策】

施設面は、聞思館、1号館については老朽化にともなう改築を将来計画のなかでおこなう必要がある。そのための検討プロジェクトを置き、予算措置を年次計画で進める。

設備面では、DVD教材の普及にともなうDVDプレーヤーの設置、PCを使用した授業に対応すべくプロジェクターの設置など、新教材に対応した機器の設置や更新について年次計画で実施する。また、総合研究室のノートPCの増設など、学生のニーズにこたえた内容、方法を検討して導入計画を立てる。

博物館においてはその施設的な整備はいちおうの水準にあるといえ、今後は重要文化財の展観に力点を置き、重要文化財公開承認施設としての認可を早急に得ることができるよう、文化財の展観活動の実績を積み重ねる。博物館の展観活動のさらなる充実にあたっては、大学博物館としてその対象とすべき層についての議論を深め、展観テーマの設定、展示品の選定、解説文の作成、開館日時の検討、広報活動のあり方などの検討をする。博物館の重要な活動のひとつである調査・研究の方面については、研究活動を強化する方策を立案する。

(キャンパス・アメニティ等)

B群・キャンパス・アメニティの形成・支援のための体制の確立状況

- ・「学生のための生活の場」の整備状況
- ・大学周辺の「環境」への配慮の状況

【現状の説明】

快適な学生生活を支援するための環境整備に努めている。構内は、中央広場のサンクンガーデンを中心に、周りを取り囲むように講堂棟、教室棟、響流館、至誠館が配置されている。都市のなかにあつて、キャンパスをクスノキ、サクラ、ケヤキ、ヒマラヤ杉などの大木が取り囲み、木々の緑が授業の合間の学生の目を休めてくれる。構内には適度にベンチが配置され、サツキやツツジ、サザンカの

低木が季節を感じさせる。隣地境界の高木については計画的に剪定をおこない、落ち葉で近隣に迷惑がかからないよう努めている。大学構内の喫煙マナーについては、第十一章の1の「生活相談等」項を参照されたい。大学周辺への迷惑駐車の問題については、委託業者による定期的な周辺パトロールなど、防止に向けた対策を講じている。

キャンパス・アメニティの形成については、施設整備、学生生活支援の両側面から支援している。施設整備は総務部総務課（施設）、学生生活支援は学生支援部学生課が担当し、内容によっては両課が協力し対応している。実際の取り組みとしては、年に1回開催する学生大会での要望事項を学生会（中央執行委員会）がまとめて大学に提出し、提出された要望を上記2課で精査検討したうえで実施計画を立て実現している。

学生のための生活の場としては、教育・研究施設以外に整えたものとして、至誠館の整備があげられる。至誠館は、響流館へ図書館機能が移転されたのにもない、旧図書館の建物を2002年に再整備した。至誠館はキャンパス中央に位置し、立地条件がよいことから、それまでは博綜館1階に分散して位置していた学生への窓口部門である教務部・学生支援部（学生課、進路就職センター）を一箇所に集約し、ワンストップサービスを実現した。

その他、学生の生活の場として、学内には、保健室、学生相談室、学内食堂、学生談話室1（Big Valley Cafe）、学生談話室2、部室棟、書店、購買部などがあり、学外には、学寮・セミナーハウスの福利厚生施設がある。

1 保健室

2002年の事務組織の再編による事務室移転にともない博綜館1階北側にあった保健室を南側の事務室跡に移転した。移転により、面積も101.20㎡から149.86㎡と広くなり、学生の健康相談に供するスペースの確保が可能となった。

2 学生相談室

保健室の移転にともない博綜館地下1階から1階の保健室跡に移転した。移転により面積も33.61㎡から83.00㎡と広くなり、1室だった相談室を2室に増設し、相談員も2名体制にするともに、受け付けカウンターを設けてインターカー（初回面接・相談を担当する者であり、来談者に最初に会って来談の目的や問題を理解し、必要な場合は担当者を紹介する）を配置することが可能となった。

3 学内食堂

学内食堂は座席数約550席である。昼休み時間帯は慢性的に混雑し、学生満足度アンケートなどでも学生からの改善の要望が多かった（「座席数は学生数に対して十分である」項目にたいする満足度は12.4ポイント、不満度は73.3ポイントであった）ことから、下記の学生相談室1をリニューアルした。

4 学生談話室1

学生談話室1（Big Valley）は、当初、学内食堂の混雑緩和のため軽食、喫茶の場として営業してきたが、混雑緩和の解決にはいたらなかった。そこで2006年秋、オープンデッキを配したカフェテリア形式に改修し、Big Valley Cafeとしてリニューアルした。座席数も約70席からオープンデッキ部分を含め120席に席数を増やすとともに、ホームメイドのパン、スープ、サラダなどを中心とした軽食メニューに一新したことから、利用者も増え、学内食堂の混雑も幾分緩和された。また、洒落た

内装やオープンカフェスタイルは学生に好評であり、休憩時間など学生の憩いの場所として利用されている。

5 学生談話室 2

学生談話室 2 は、面積 145.80 m²であり、学生の休憩スペースとしてソファや観葉植物を配置するなどし、授業の合間の語らいの場となっている。

6 部室棟

部室棟は南北 2 棟の 3 階建ての建物で、学生会、新聞社、放送局の他体育会、文化総部、社会総部に所属するクラブ、同好会の部室が 73 室ある。部室はクラブの活動内容に応じて音楽系クラブには防音仕様の練習室を設置するなどの配慮をしている。また、各団体の打ち合わせ・ミーティングなどに使用できる会議室を設けている。2005 年夏にはエレベーターを設置し、障害者の利用に対応できるようにした。

7 書店・購買部

学内書店は本学の専門性もあり、仏教書を中心とした書店として長年営業している。仏教書、教科書販売が中心ではあるが、最近は雑誌を置くなど努力は見られる。しかし、サービス面では学生からの要望に十分にこたえられていない面もある。

購買部は、学内食堂を営業している業者に委託しているが、品揃えが少ない、営業日が少ない、営業時間が短いなどの学生からのクレームもあり、抜本的な見直しが迫られている（満足度アンケートの「営業時間は適切である」「品数、価格は適切である」項目にたいする満足度は、それぞれ 26.1 ポイントと 29.5 ポイントであった）。

8 学寮

学寮として、貫練学寮^{かんれん}と自灯学寮^{じとう}を設置している。貫練学寮は、京都市北区大宮薬師山西町 15 に所在し、敷地面積 1,948.25 m²、建物面積 1,534.32 m²、収容定員 20 名の男子学寮である。また、自灯学寮は、京都市左京区松ヶ崎御所ノ内町 13-2 に所在し、敷地面積 1,174.62 m²、建物面積 894.80 m²、収容定員 16 名の女子学寮である。

いずれの学寮でも寮生は入寮希望者から選抜され、第 1 学年次、1 年間限りの入寮である。寮生活は朝夕の勤行をはじめ、寮生の自主運営による定期的な文化活動が実施され、本学の理念に則った人間教育をおこなう教育寮として位置づけられている。入寮希望の学生が減少した時期があったが、近年は、学生のための生活の場として見直され、入寮希望学生は増加傾向にある。

9 セミナーハウス

湖西キャンパスセミナーハウスは、滋賀県大津市雄琴 3-33-3 に所在し、建物面積 2,284.63 m²である。70 名から 108 名収容の研修室が 3 室、6 名から 12 名の宿泊室が 13 室、防音設備を施した練習室が 2 室、ゲスト室が 2 室および食堂・浴室からなり、主にゼミ・クラスの一夜研修会や課外活動の合宿などに活用されている。

【点検・評価（長所と課題）】

響流館建築後の施設の転用により、保健室、学生相談室の体制の強化や、1 箇所です務的な手続きや相談がおこなえるワンストップサービス化（至誠館）を実現してきた。また、「学生のための生活の

場」としての学生談話室1の拡充をはたしてきた。

購買部・書店についても、学生の満足度の低い項目については改善策を検討する必要がある。

大学周辺の環境への配慮では、これまでの施設の整備計画のなかで防音設備を施した音楽練習室を年次的に増設整備してきたことにより、近隣からの苦情がほとんどなくなった。駐車スペースについては、本学の立地条件は交通の便に恵まれており、今後も自動車通学を認める予定も、駐車スペースの確保の予定もない。迷惑駐車については現在おこなっているパトロールにより、減少している。

【将来の改善・改革に向けた方策】

満足度アンケートによる学生の満足度の低い項目の「購買部・書店」については業者とも話し合い、着手可能なことから順次、改善していく。

(利用上の配慮)

- A群・施設・設備面における障害者への配慮の状況
- C群・各施設の利用時間に対する配慮の状況
 - ・キャンパス間の移動を円滑にするための交通動線・交通手段の整備状況

【現状の説明】

本部キャンパスの校舎、11棟のうち9棟にエレベーターを設置している。エレベーターのない2棟のうち1棟（尋源館）には隣接する建物（博物館。エレベーター設置）からの渡り廊下で車椅子の移動が可能となる措置が施されている。また、点字ブロックの敷設、点字案内板の設置、室名表示に点字表記をつけるなど視覚障害者対応、各所に手すりやスロープを設置するなどのバリアフリー化の取り組みもおこなっている。その他、体育館には障害者用シャワー室、各建物には障害者用トイレを設置し、そのうち1箇所には電動昇降便座を設置している。湖西キャンパスセミナーハウスの施設については、エレベーターの設置、スロープ、点字表示などの障害者への対応が整備されている。

本部キャンパスの開門時間は8時、閉門時間は21時であり、夜間は閉じている。他章でも述べている学生の利用できる施設とその利用可能時間をここでまとめて示すと、下表のとおりである。

施設名	利用可能時間	備考
教室棟・講堂棟	8時～20時	授業終了後、クラブ活動などに開放
図書館	9時～19時30分	土曜日は10時～17時30分 定期試験期間中（試験開始1週間前から）は開室時間を延長
総合研究室	9時～19時30分	土曜日は10時～17時30分 定期試験期間中（試験開始1週間前から）は開室時間を延長 定期試験期間中以外にも、不定期に開室時間を延長
体育館	8時～20時	
クラブボックス棟	8時～21時	

表 8.1-5 学生の施設利用可能時間

本部キャンパスと湖西キャンパス間の移動については、2台のスクールバスを運行している。

【点検・評価（長所と課題）】

利用上の配慮としては、施設・設備面において障害者にたいしては、構内のバリアフリー化を年次計画で推し進め、最低限の整備はできていると評価している。ただし、聞思館にエレベーターが設置されていないことは、課題となる。課題キャンパス間の移動については、2 台のスクールバスを運行している。

【将来の改善・改革に向けた方策】

エレベーターの設置されていない聞思館には教室はないが、教員の個人研究室があり、学生にとっては重要な校舎である。聞思館は、前述のように老朽化してきているため、建替え、改修計画の策定および改修の実施を急ぐ。これまでのバリアフリー化は学生として受け入れた障害者への対応を主としていたが、今後はさらに生涯学習社会に対応する観点から高齢者をも視野に入れ、大谷大学を訪れるすべての人に優しい施設、設備の整備をめざす。また、大谷大学として対応する基準（国などの基準を上回る）を決め、整備完成目標を立て取り組む。

施設の利用時間については、学生の要望とその効果を比較検討し、実現可能なことから取り組む。

（組織・管理体制）

- B群・施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況
- ・施設・設備の衛生・安全を確保するためのシステムの整備状況

【現状の説明】

施設・設備（建物、備品、用品、情報関連設備等）の維持・管理は、総務部と教育研究支援部が担当している。機械設備、電気設備、上下水設備、昇降設備などの維持・管理は総務部の責任でおこなっており、情報関係設備は管理部門については総務課が、教育・研究部門については教育研究支援部教育研究支援課がそれぞれおこなっている。これらの維持・管理の多くは、外部業者と委託契約を結び実施している。防火、防災の面では、防火管理委員会の管理のもと、自衛消防隊を組織し定期的に消防訓練をおこなっている。

情報系では、学術情報本部委員会が学内の教員系・学生系ネットワーク（OUNET）について「OUNET 利用指針」を作成し、指針に沿って適正な利用を指導している。

衛生確保については、水は京都市の水道水と一部井戸水を利用している。井戸水はトイレ洗浄専用に利用されている。水道水は入水槽の年 1 回の定期的な清掃と水質検査を実施し、衛生確保に努めている。また、教室、廊下、トイレ、建物内外の清掃は、委託業者によりおこなっている。キャンパス内の安全確保については、守衛所には防災設備管理基板を設置し、委託により 24 時間体制で夜間警備、巡回業務をおこなっている。

また、本部キャンパスは幹線道路である烏丸通を挟んで東西にキャンパスが分かれているので、東西キャンパス間の安全な移動やバイク駐輪場の出入りの安全確保のため、係員を配置している。

【点検・評価（長所と課題）】

施設・設備の管理については、その内容により適切な担当部署を取り決め、担当部署から委託先責任者・派遣先などへの連絡体制を確立している。

施設・設備のメンテナンス・清掃管理については、十分な把握ができるよう、検討の必要がある。

【将来の改善・改革に向けた方策】

施設・設備のメンテナンス、清掃については今後さらにアウトソーシングが進むものと思われるが、担当部署で状況が把握できるよう体制を整備する。